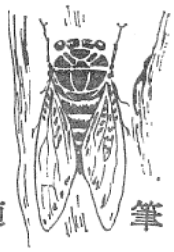

随筆

短歌のすすめ

佐　賀　二　郎*

「技術に携わる我々に歌など無用の長物じゃ」とお叱りを受けそうである．ごもっともである，私も以前はそう思っていたのだから．ところが全く思いがけないことから私は短歌を読む（詠むのではなく）破目に陥ったことを今は喜んでいる．

日米戦争が終末に近づいていた昭和20年3月，大阪は第1回の大空襲を受け，旧市内の大半が焼けてしまった．その頃住友金属製鋼所研究部に勤めていた私は，当夜宿直で，真紅の火の海と化した市街を屋上に立って茫然と見詰めていた．「いつ死ぬか分らない，死ぬまでにせめて何か日本の古典を読んでおこう．高等学校では十訓抄と神皇正統記しか読まなかったから」，そう思って何気なく買い求めたのが武田祐吉著註釈つき万葉集であった．通勤電車の中でも，防空壕の中でも，所構わずに読み耽った．

茜さす紫野ゆき標（しめ）野ゆき野守は見ずや
君が袖振る　　額田王（ぬかたのおほきみ）　　（巻1—20）

紫の匂へる妹を憎くあらば人妻ゆゑに
われ恋ひめやも　　天武天皇　（巻1—21）

驚歎しましたね．「古代日本人はこんなに大らかで大胆だったのか，今の日本人はこせこせして小心で，島国根性丸だしだが．これが分っただけで，いつ死んでも悔いはない」と涙がとまらなかった．

戦争は間もなく敗戦で終り，幸いにも生き残った私は，仕事が忙しくなるとともに，歌のことなど全く忘れ去っていた．ところがまたまた偶然が私を短歌に接近させることになった．大阪市大に勤めていた昭和35年のある日，金子清治という男が求人に来た．彼は明石製作所の総務部長だった．「折角ですが，おうちを志望する学生は多分いないでしょう」と断りに近い返事をすると，「いや結構です，もう二度と求人には来ません．その代り東京へ出て来たら是非寄って下さい」と帰っていった．面白い人だなあと思って，上京のついでに彼の会社を丸の内に訪ね，彼と夕食を共にした時，私は初めて彼が歌人でもあることを知った．彼は一秋と号し，コスモス（宮柊二主宰）同人であり，別に「泥」という同人雑誌の会長でもあった．丁度刷上ったばかりの雑誌を押付け，代りに50円を私からふんだくり，あまつさえその中の彼の歌を批評して送れと強要したのである．仕方なく帰りの車中で彼の歌を読み，10首中から，

佐保川の低き堤のつらなりの遙けきかたを雲わたりゆく　（泥 No. 5　'60-5）

鳥のさへづり明るくひびく雨の間の砂
踏みゆけば法隆寺なり

を採り，これが好きだと書送った．程なく返書が来て，「工学をやっているくせに歌が分るとは怪しからん，あれは会でも褒められた歌だ．以後は無料で遣る」とあった．これが奇縁で金子と親友になり，会うごとに彼の文学論，労働問題論を拝聴し，代りに私は自分の研究成果について語ったものである．その彼が緑内障を患い，失明に近くなって現役を退いたのは45年の冬だったと思う．寝耳に水で驚いた私は，彼を慰めるべく．彼の短歌に作曲することを思いたち，ヴィヴァルディの四季に因んで彼の作歌の中から春夏秋冬の一首ずつを選んで作曲し，「四季の歌」と名付けて彼に献呈した．一つの曲を作るのに何十回同じ歌を朗読し，歌にふさわしいメロディを考えたかわからない．お蔭で全部暗誦できるくらいになった．このことが私を一層短歌に接近させ，後の作歌に大いに役立つことになったと今にして思う．その時選んだ歌は，

* 佐賀二郎（Jiro SAGA），現在　阪大名誉教授，前　阪大基礎工学部教授，機械教室非切削加工講座（4月2日退官），工博，機械工学（金属材料）

鳥のさへづり明るくひびく雨の間の砂
踏みゆけば法隆寺なり　　—春—
丈高き粗(あら)草は日に揺らぎつつ此処より
見ゆる税関の塔　　—夏—
啄木の墓石のめぐり森閑と赤とんぼ
飛び日射し暑しも　　—秋—
ひとり来てあてどもあらず坐りをり日
暮れし山の秀(ほ)に赤き雲　　—冬—

の4首である．

半年後金子は沖縄に新しい職場を得，私達夫婦は彼の招待でかの地に遊んだ．その時冗談半分に作った歌

三千人自決せりてふ壕の辺に梯梧(ていご)の
紅き花の影落つ

を聞いて，「お前，今から始めても，ある所まではゆけるぞ」と煽てられ，「てふ」は古いからと「とふ」に，「三千人」は「数千人」に添削してくれた．これに勇気づけられて，コスモスに初投稿したのが昭和49年10月，この歌の載ったのが昭和50年1月号であった．その年特選欄に5首が3回載り，1年で上級の「あすなろ」に昇格し，今年で5年目になる．

歌などに興味なかりしわれをしも引摺
り込みし一秋憎き

さて短歌の功徳は何かを語るのがこの小文の眼目であったのだが，紙数が尽きようとしている．それでズバリ言おう．短歌を始めて研究がうまく進捗するようになり，日本文が少し上手に書けるようになったと思う．理由は説明しにくいが，作歌には物事の仔細な観察と，骨惜しみなく辞書を引いて最適の用語を見付け出すこと，そしてそれの上に短詩型文学を完成しなければならない．そのためには，専門書だけではなく古今東西の名作をも読んで，広い教養を身に着ける必要がある．こうした努力は当然研究の上にも反映して来る．広い視野に立って物事を眺めると，今まで気付かなかったことに気付くから不思議である．これは研究の分野に限らず，教育，設計，開発，生産，管理等，いかなる分野にも当てはまると思う．仕事がうまくゆかないのに歌どころではなどと思う方は，私の言うことを信じてやってご覧．歌を詠むことにより人生が広く，明るく，楽しくなって，自然に仕事がスムーズに行くようになること必定である．4月から現役を離れて暇ができたので，作歌に一層励むつもりでいる．恥かしながら自作の一部をご披露してこの小文を終ることにする．

三丈三尺螺旋階段昇りつめ十四万カン
デラの燈器を見たり　　観音崎灯台

舞ひ落ちて肩に懸れり命終へし銀杏の
一葉次ぎてまた一葉　　御堂筋

湯の煙ほのかに匂ひ限りなく星のきら
めく指宿の空　　49年南九州旅行

病院に孫をば看取る妻を思ひ風強み来
る夜を寝ねんとす　　50年孫娘心臓手術

還暦を祝ひて呉れしバッハ集眺めまは
して茫然とをり　　還暦パーティ

鳩の群寄り来て手より餌を食むトラフ
アルガーの広場に来れば　英国出張

朝な夕な飽かずも君の眺めけん生駒の
山に夕霧わたる　　51年金子との別離

六十を過ぎて学会賞を受く数多の視線
背に浴びつつ　　52年塑性加工学会

機動隊と共に立たさる寒空に入試粉砕
のビラはためきて　　53年入試

視力とみに弱り来しこと寂しめり小雨
の庭に草取りながら　　5月連休

やりかけの仕事溜れる苛立を宥むるご
とく除夜の鐘鳴る　　大晦日

歌枕訪はましものを職持てる身の悲し
さよ春は間近き　　54年新春

戦後より三十年を務め来し教職去らん
日は迫りたり　　同　上